



ムシキング
小川幸夫の

虫の世界から

農業

プロフィール
1974年、千葉県柏市生まれ。慶應義塾大学経済学部で農業をテーマに卒業論文を執筆し、卒業後は農業機械メーカーに就職する。東北の営業所に勤務した後、野菜農家の実家に就農。今年で13年目を迎える。

第6回 続・畑の 昆虫ハンター、 カマキリ

4月を過ぎるとたくさん昆虫が畑に姿を見せるが、それを待っていたかのように卵からかえったチビツコカマキリがワサワサ出てくる。昨年、筆者の畑や周りの木々のあちこちに200近くの卵鞘（カマキリの分泌物で守られた卵の塊）が産み付けられているのを確認した。

1つの卵鞘から現れる幼虫は数百匹に及ぶ。カマキリはさなぎにならない不完全変態という性質を持ち、生まれた幼虫のときからカマキリの形をしている。5月までに次々と誕生し、この時期の畑はカマキリの幼虫だらけになる。しかし、最終的に生き残る個体はほんのわずかで、いかに生存競争が激しいかが想像できる。とくに無防備な状態で生まれる瞬間はアリの攻撃を受けることが多い。また生まれたての個体は弱小で歩行性のクモなどに簡単に捕まってしまう。とはいえ、その時期を過ぎれば、昆虫間の食物連鎖の上位に立つ恐怖の存在になる。

脱皮とともに大きな獲物に ターゲットを変更

カマキリは益虫か害虫かとても判断が難しいが、筆者は益虫に分類している。なぜ判断が難しいかというと、害虫も益虫も食べてしまうため、その時々でどちらともいえてしまう

からだ。だが、カマキリは畑の肉食昆虫のなかでは上位に位置しており、そのおかげで偏りがちな害虫と益虫のバランスが保たれている。したがって、カマキリのような肉食昆虫は畑に欠かせない。

さて、カマキリは生まれながらにしてカマキリの格好をしていると述べたが、それは生まれた直後から獲物を捕れるということでもある。そんなカマキリのすごいところは、自分の体の大きさに合わせて獲物を変えていくところだ。脱皮を繰り返して、自分の体が大きくなるにつれて食べる獲物も大きくしていくという食性の広さは他の昆虫にはなかなかない。

生まれて間もないチビツコカマキリたちの餌は、アブラムシやダニ、コナジラミ、アザミウマといった極小害虫などになる。4〜5月といえば、筆者のところではよくイチゴの畑に小さなカマキリが集まるが、これはイチゴに群がる小さな害虫たちを捕食しにきているからだ。極小の害虫を食べて脱皮すると、今度はハエやアブ、ハチを餌にする。こうして自分の成長とともに食べる獲物を変えていき、夏のセミや秋の大型のバッタ類など、ターゲットを変えて大きくしていく。

カマキリのすごいところは食性の

広さにとどまらない。夜間も活動できるのだ。夜に動く昆虫といえば蛾など害虫が多いが、それを目で捕らえては鎌でつかまえて食べてくれる。夜は活動できない同じ昆虫ハンターの狩人蜂たちとはまた違った働きをしてくれるわけだ。

環境の変化に順応し、勢力を 維持するハラビロカマキリ

日本ではカマキリの種類は約10種類ほど存在する。主に畑のカマキリは、オオカマキリ、チョウセンカマキリ、ハラビロカマキリ、コカマキリの4種類になる。

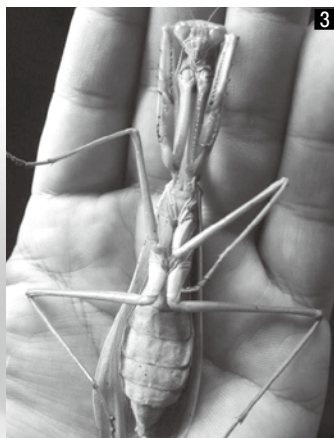
オオカマキリとチョウセンカマキリはかなり似ているが、後ろ羽の色が異なる。チョウセンカマキリが薄い色なのに対して、オオカマキリは紫褐色をしている。また、チョウセンカマキリの胸はオレンジ色であるのが特徴だ。

ハラビロカマキリは、少し小型で名前のとおり腹が広く膨らんでおり、羽に白い紋がある。コカマキリの仲間にはさらに体が小さく、前足の内側に黒い帯が認められる。

ただ、コカマキリも近年では見ることが少なくなってきた。これは雑草を刈ってしまうことが原因だと思う。そんななか、最近よく目にするのはハラビロカマキリだ。このカマ



1 畑に設置した卵鞘から生まれたチビツコカマキリたちが並んで畑に降りていく。2 秋にお腹を膨らませて卵鞘を産む場所を探すオオカマキリのメスたち。筆者が卵鞘を産みやすい場所に移動させる。3 卵鞘を何度も産んで成仏した母カマキリ。



キリは、人工の建造物の壁に卵を産み付けられるため、人間と共生しやすい。そのため、筆者のような都市近郊農業では自ずとハラビロカマキリを見かけるわけだ。

一方、草の枝に卵を産み付けるオオカマキリは、人間によって草刈りされてしまった場所では卵鞘を産む場所がないことから、仕方なく野菜の茎を選ぶこともある。しかし、軟弱な野菜の茎に卵鞘を産み落としても、翌春まで茎がしっかりしていないと卵自体がダメになってしまう。したがって、一部荒地のような場所も残っていないとオオカマキリは繁

殖できない。

収穫後の野菜残さに卵鞘あり

畑の周りに草地や樹木、建造物などがあると、お腹を膨らませた母カマキリは自分で卵鞘を産みやすい場所を選ぶ。適当な場所がなければ、畑の中に卵鞘を産むことになる。定期的に秋で、畑の野菜の残さを片づける際によく卵鞘が付いていないか確認されたい。とくにアスパラガスやオクラ、モロヘイヤなど草の枝のような野菜残さのところにオオカマキリの卵鞘が付いている。処分す

る前に捕獲し、翌年の春にぜひ畑に戻してあげたいものだ。筆者のころでは畑の野菜残さに付く卵鞘を畑から回収し、翌年の春にまた畑へ戻している。

ちなみに、カマキリの卵鞘も成虫と一緒に、その形状とどこに産み付けられているかでどのカマキリの種類かを判別できる。オオカマキリは大きな泡の塊状で草木の枝に付いているのに対して、ハラビロカマキリは小さな硬い丸型で木の枝や壁に付いている。また、チョウセンカマキリとココカマキリは細長く薄くベタつと木の枝や壁に付いており、ココカマキリのほうがやや小さめになる。畑の中に産み落とされる卵鞘はほとんどがオオカマキリのものだが、他のカマキリの卵鞘もたまにあるため、それぞれの卵鞘の形を覚えて保護してみてもいいだろうか。

有効活用すべく、害虫の発生具合を見て、卵鞘の設置を

卵鞘は大事に部屋の中で保管する必要はない。自然の寒さに当てておかないと、早くチビツコカマキリが生まれてきてしまう。食べ物である害虫がいなければ、共食いが始まり、やがて餓死する。

寒いところで管理した後、害虫の発生具合を見て、卵鞘を設置すれば

準備完了だ。カマキリは飛ぶのが苦手で、行動範囲が非常に狭い。そのなかでカマキリが食べる昆虫の種類が豊富でないと生きていけない。そう考えると、単品目大量生産の場ではカマキリを見かけることもないだろうし、実際に使えることもないかもしれない。だが、屋敷畑などで自宅と畑が繋がっているような場所では庭と畑でカマキリの往来があり、そういうところでは知らずと働いてくれていると思う。もちろん、多品目の農業ではカマキリはとても威力を発揮してくれる益虫になる。卵鞘を保護してぜひ有効活用されたい。

余談だが、チビツコカマキリがなかなか出てこない卵鞘の中ではカマキリタマゴカツオブシムシというカマキリの天敵がよく寄生している。カツオブシムシというのは人間の衣服に穴を開けてしまう例のあれで、カマキリタマゴカツオブシムシはその仲間になる。寄生された卵鞘や生まれて空になった卵鞘はカマキリタマゴカツオブシムシの発生源になるため、処分を勧める。

最後に、これをいうとびっくりする人が多いが、カマキリは分類上、ゴキブリに近い生き物になる。羽の作りや飛び方を見るとたしかにうなずけるだろう。